

禅宗教団成立の諸問題

古 田 紹 欽

失礼しまして坐わらして頂きます。只今、鏡島先生から過分の御紹介をいただきまして甚だ恐縮する次第でございます。

本日は、一応講題を掲げましたが、あれこれと思いつきのようなことを多分に申し上げることになるかと思えます。ついでには、纏りのない話になるかも知れませんが、かねて考えておりますところの一端を申し上げて、御批判を仰ぎたいと存じます。

従来、日本仏教史の諸問題が取り上げられますのに、どうも既成の、現実の教団の勢力が問題の背景にもたれて、論ぜられるということになりがちで、現勢力が時代を遡っても形成せられていたかのごとき、錯覚をもつ場合が少なくないのではないかということをつくづく感ずるのでございます。道元・親鸞・日蓮といったことが現勢力の教団を踏えていわれていることなども、そのよい例であると思えます。現勢力

の教団を離れて、日本仏教思想史の上で見直されなくてはならないものがあることについて、私はその最も顕著な例を一遍に見るのであります。その形成した時宗教団は今日では微々たる勢力しか持っていませんが、思想史的に見ます場合に、一遍の存在はもっともっと評価されなければならないし、事実一遍の存在が時代に及ぼした影響の少なくなかったろうことを思わずにはいられないのであります。もう今から二十年程前に、もっと前になりましたか、この一遍の存在のもつ意義について、ささやかな評論を書いたことがございますが、今日顧みますると一遍の存在がだんだんと注目されてまいりまして、中には一遍についてのベストセラーになったような書物も今日には現われるというようなことになりました。まことに我意を得たりというようなことを思うのでございます。もっとも既成教団の勢力を離れて見るといっても、今に伝っている資料がどこまでその歴史的事実を伝えて

いるかというようなことを疑ってかかりましたならば、詮索にきりのないことですが、まあ、それはそれぞれの人の考え方にまつより外はないでしょう。

日本仏教史はどうかいたしますと、日本仏教教団史になっていて、日本仏教思想史といっても、教団の背景の上に見られ、教団の勢力が固定化したことから思想史も固定化した形で依然としてとらえられているのであります。一例を申しまするならば、鎌倉仏教は、専修、選択を標榜して一宗の独立というものが計られ、それが時代の氣運に乗りまして、教団の勢力がその標榜の下に拡大していったのであります。しかし、その勢力の拡大が成功するまでにはかなりの歳月を要したのであり、例えば法然が専修念仏を標榜するに、大いに時代の要請に應えるものがあつたとしても、弾圧もあり、法然門下にあつてその教団の發達が遂げられたような形で、法然の時代にその勢力があつたとは考えられないのでございます。

そんなようなことを考えますると私自身、拙著『日本仏教思想史』の中で、「選択の一宗」ということの意味合いを重視しておりますが、どうも後に形成された教団史の上からこの問題を考へてきたようであり、これをいうについてはいささか注釈を加えるべきではなかったかということは今思うのでございます。と申しますのは、ここで改めて申し上げる

までもなく、この鎌倉になってまいりますと、すでに南都六宗が成立し、そして平安時代になりまして天台、真言の二宗が成立し、いわゆる八宗が出揃つたのでございます。仏教の基本的な教えが出揃つたのであります。そのなかで新たな仏教運動というものを起こそうということになりましたならば、もう教えはすでに出揃つてしまっているわけですから、なんらかの新しい方向というものを打ち出さない限り、新しい一宗の独立ということは期せられるわけはないのであります。そこで、「選択の一宗」という教えの選択が標榜されることになり、その選択は真宗の教えによるものではなくてならないとし、その真宗の教えは既成の宗にはなく、新宗にあると主張したのであります。ただこの場合、どれだけこの主張に共鳴するものがあつたかであります。

実は、今ある講義で江戸時代のテキストを読んでおります。仏教のテキストというよりは、もっと広い立場で庶民教育の問題を取り上げているものであります。庶民が變動する經濟情勢のなかで、日常の倫理をどのようにして守っていくべきかを説いているのに、商業行為との関係においていっている点、大變興味深いものを覚えたのであります。人間霞を食つて生きていくわけでありませんで、何時の時代にあつても教えが説かれるについては、生活に密着したものでなくては教えが教えとして役立つ筈はなく、またその教えはそれ

でなくてはひろまることにはならないと思います。江戸時代であろうと、鎌倉時代であろうとそれは変りはないでしょう。また教えがひろまるについては、よく易行ということが取り上げられますが、勿論それはあるにしても伝達ということが通信・交通の上に効果がどれだけあったかどうかということも考えられなくてはならないことであると思います。その点、鎌倉時代に京都、鎌倉の相互間歩けばどれ程の日数が、馬ではどれだけの日数を要したのか、『吾妻鏡』などをみますれば、一応の基準日数が割り出せるわけで、こういうようなことを、鎌倉仏教の資料の上に読み取っていかなければ、教えがひろまっていったという実体を具体的に理解することはむづかしいのではないかと思えます。

「選択の一致」が時代にアピールするものが確かにあったとしても、その教えがひろまるに至った要因というものは、それ自体にのみあったとは考えられないのであります。日本経済史の知識を欠きますので、少しあてずっぽの話になりますが、鎌倉時代は日本経済史の上でマスマスプロダクションの時代を迎えていたといえるのではないのでしょうか。このことは仏教史の上にも当てはまることで、既に八宗が成立していて仏教のマスマスプロダクション体制というものが出来上がり、この傾向は更に強まろうとしていたと考えます。その体制の上に凡そ仏教のことを知りたいと思えば間に合わないものはな

かったわけです。

こういう傾向が強まって参りますと、幸に中国との交渉も出来る状態にあり、従って中国にまで及ぼしてその傾向に応えようとする動きが起ってくるのは当然であり、入宋求法ということも盛んになったのであります。鎌倉時代には経済上にも中国との交渉が起っていたのじゃないでしょうか。市場の例を引き合いに出しては不謹慎かも知れませんが、仏教の種々の教えは市場に列んだのであり、この上は買手というわけで、その上、新種も渡来しましょうといった按配で、日本の仏教は市場で客待ちの体制にあったのであります。この際、新鮮さということも大いに呼びびものであったことは当然であります。その際、市場は売れ行きの良い足場になくは何んとしても客足はつかないのであり、仏教がその足場を定めたのは京都と鎌倉とであります。そして相互の流通を計ったのであります。

ここで考えられるのは、マスマスプロダクションに対するマスマスコンサンクション、つまり大量消費であります。大量生産されても、大量消費がなかったら何の意味もなく、消費の拡大がなくてはなりません。これを思想的に申しますならば消化であります。いかに教えの門が大量生産的であっても、教え放しではただだぶつくだけであります。

もっとも大量生産されたものが大量消費に結びつくにはマ

スセール、つまり大量販売の方法がとられなくては効果をあげる事が出来ません。品物が安いといっても安いだけでは充分売れることは出来ないように、易行であるというだけではそれをひろめることは充分ではありません。マスセールの方法・技術をそれには必要とするのであります。

その方法・技術にはマスメディアによるマスコミュニケーションをしないで済む必要はありません。つまり媒体となるものであります。文書伝道とか演説・説教といったものであります。

鎌倉仏教はまさに文書伝道・演説・説教を盛んにしたのであり、これが必要であることの認識は、仏教の指導者の間に強くもたれていたのであります。

私は今日遺っているこの時代の文書、典籍、記録などについて、それがマスメディアとしてどのような役割りを荷い果たしたかについて、改めて調べたいと思っております。さてこうした原則に伴って、マーケットを何処に見出すべきかであり、商品は売れる場所を設定することがなかったら大量に売れることにはなりません。より多く売るためには消費の盛んな地をさがすことであり、仏教を教え説くにも消費の少ない山岳に行ったのでは人口が少なく、それに不便で多く売れることにはなりません。そこで多く売れる売り先を見出したのが在家・在俗を対象としたことであります。出家者を相手にしただけでは、売れるたかが知れていて、どうして

も在家者を相手にしなくてはならなかったものであり、それが鎌倉時代の在家を中心とする仏教ということになっていたのであります。在家は出家よりも遙かに人数が多く、在家中心の仏教は取りも直さず、マスプロダクションのマスコンサンプションということになり、マスセールがマスメディアを通じて行われることになったのであります。法然などという人はこの点、実に素晴らしい頭脳の働きをもっていた先見者であつたと思ひます。

八宗に対して浄土、禅の二宗が興つたのは時代の要請に外ならなかったと思ひます。この新しい教えが市場を随分かき廻すということになり、浄土宗などは随分大安売りをして市場を混乱させるのであります。一方禅はというと、一箇半箇というようなことを申して、自分の後継ぎには、すぐれた弟子が一人とか半人とかが出来れば結構だというのであり、禅はエリート教育であります。少数教育であります。しかし小売店は大資本の店にそのままでは推されて仕舞うように、禅もそこには何等かの対策がなくてはならなかったものであります。禅といえども所詮はマスコミュニケーションの形を辿って行かざるを得なかったものであり、禅にも在俗者が読んでもわかるようなテキストが必要となつたのであり、ついでには仮名書きの法語というものが続々と現われることになるのであります。

大体、禅のテキストは漢文体のものが殆んどであり、仮名書きのものは女性に大いに歓迎されたのであります。昔とも今と同じく日本の全人口の半分は女性であったのであり、マスコンサンクションを計るには、何んとしても女性を分離するわけには参りません。初期の禅宗教団に女性が加わってくるのは、最も注目すべきことではないでしょうか。

ここでそろそろ主題に入っていきたいのでありますが、禅宗は一宗として勢力を拡大するには最も困難なものを内在的にもっていて、「不立文字・教外別伝」といい、前述もしたように一箇半箇などといい、凡そ拡大を計るには、その反対のようなことをいうのであり、これがどうして市場の販売競争に加わることが出来るかであります。この点、初期禅宗の形成者である栄西が最も苦慮したところであります。

鎌倉時代の大きな課題は、一口にいえば専修か雑修かという点であります。このカテゴリーではマセールの課題にはならないのであります。繰返して申しますが、鎌倉仏教の特色を従来のように「選択の一宗」にあったとするには、注釈を必要とするのであり、マーケットはそんな宣伝文句では客足がつくとは限らなかつたのであります。栄西の禅の立場は一種のこの総合主義、悪く言えば混合主義をとつたのであり、選択の一宗ということからしますと、いわば雑然とした教えであったと、こういうふうに見られるわけでございます。

すが、果たしてそういうふうに見て良いかどうかであります。栄西は既成教団が八宗として成立し、その勢力が定着している中で、一宗の独立を唱えるには、唱えるだけの市場は八宗にならぶかたちではないかと判断し、何を考えたかという、何んでも列んでいる総合市場のような形態を仏教に考えたのであります。禅戒一致主義に立つかと思えば、禅と密教との融合をはかり、自ら唱えるところは叡岳の祖道と変るものではないといい、最終的には新たに唱える禅宗は、仏法の総ての教を総括するものであるといい、仏教の総合主義を唱えたのであります。

小売店を集めて一つにした大きな市場を建て、何んでも売りますといったわけで、そこにはマーケットをどのようなものにするかの、マーケット・リサーチともいべきものがあったと思えます。栄西という人はこういう点について経営手腕があつた人であり、そうしたところからある面では批判を受ける点があつたのであります。叡山を手玉にとっていくあたり、たいした見識であります。慈円など栄西は煙たい存在であつたに違ひなく『愚管抄』あたりを読むと、そんな気がいたします。平家が没落し、源家が興ってくるあの動乱期を見事に切り抜けるあたり、なかなかの才覚者であります。

話はまあ行ったり来たりして恐縮ですが、栄西は最初の入宋から帰国致しました時には多くの天台の典籍をもたらして

いて、最初の入宋において、果たして禅を伝える意志があったかどうかであります。あったとしても栄西のマーケット・リサーチでは伝える見込みはなかったと思います。宋朝の天台を伝えて叡山に新風を齎らそうというのが入宋の最初の目的であり、それをひそかにバックアップしたのが明雲であったかと考えます。平家の帰依を厚くした明雲が、平家の没落と共に悲運な最後を遂げなかったならば、栄西の生涯は別のものになったかとも思われたいではないのであります。栄西の弟子の明全は明雲と何か関係があるのではないかと推測していますが、この明全が道元を伴って入宋するのであり、明雲と栄西との関係は、微妙な関係を明全と道元との間にもこの結果になりかねなかったのであります。

栄西は悪くいえば大変に変わり身の早かった人であり、栄西が大師号を望むなどということは、僭上の沙汰であると慈円は非難するのであります。それだけの評価を得るだけの實力のあった人であったことは間違なく、従って慈円は栄西が憎くてしょうがなかったのであります。話は余談のようでありますが、このことはどうしてもふれなくてはならないのであり、叡山のもつ権力が明雲から慈円に移るに及んで、栄西が叡山に対して腹を決めたものがあるのであり、それは叡山が伝教大師以来、円・密・禅・戒の四宗の総合主義に立つ日本天台であったのに対して、新たな総合主義を叡山の向こう

を張って唱えたことであります。

叡山の総合主義は、伝教大師の時代には新しいマーケットを開拓するものではありませんでしたが、鎌倉時代になると客不在のマーケットといった恰好になっていったと思います。そこを栄西は京都の市中と鎌倉に新しいマーケットを開いて対抗したのであり、しかも禅という新製品を看板にして売り出したのですから、叡山は黙っているわけには到底いかないのであり、いろいろと栄西に難くせをつけるのであります。叡山の弾圧があつて、建仁寺に止観院と真言院を置いたといわれますが、このことは逆に栄西が進んでおいて、叡山の存在的意義を失わしめようということにあつたかも知れません。もう時代は叡山という山の上で商品売ろうとしても客足は駄目であり、あまつさえ叡山は勢力争いで常に内輪もめばかりしている仕末であり、時代が直面しているマスの問題に無関心とあつては、民衆とのかかり合いなどということは、観念から全く失われていたといわなくてはなりません。法然が叡山を降りたということは重大な意味をもつのであります。もう一つ栄西がねらつたマーケット・リサーチは文化活動を伝道の背景にしたことであります。東大寺幹事職となつて東大寺の復興につくし、法勝寺九重塔を建立するなどの造営に力量を示し、また『喫茶養生記』のような書物を書いて文化的教養の巾の広さをもっていたことであります。こうしたことは

世俗的な活動ということになります。この世俗的活動がなくて、宗教活動は最早成功しないということ、榮西は認識していたのであります。

ただ榮西は文化人であったあまり、マーケットに商品を列べるのに、顧客のことは考慮せず、高級品ばかり列べたきらいがあり、従って買手は限られるということになり、買手が押すな押すなと押しかけるということにはならなかったのであります。マスセールは不得手であったようであります。大師号の宣下を望むというようなことでは、マスセールなど出来る筈はないでしょう。榮西はその時代としては自からの手となり足となるようなすぐれた弟子をもつのであり、例えば莊嚴房行勇、積円房榮朝、また前述した入宋して客死した明全などがあるのであり、客死した明全は別として行勇・榮朝の一代の活動はめざましいものがあります。時代が急激に変化し、大衆市場ともいふべきものが要請されていくなかに、その存在は限られた知識人の間に迎えられる、マスとの結びつきを失っていくのであります。

建仁寺などは可成りの規模をもった禅院として建てられたのであります。門を開いて誰彼となく迎え入れるというところでなかったために——つまりそうした活動家が住いしなかつたために衰えていくということになったのであります。榮西の名著に『興禅護国論』がありますが、興禅が取りも直さ

ず護国となることをいっているにしても、そこに民衆ということが興禅とのかかり合いの上にいわれていないのは、何んといっても時代を見る目に限界があったといわなくてはなりません。一宗の独立は官許ではなくて民衆の集団力、マスであるということはわからなかったようであります。『日本仏法中興願文』という願文をしたためて、日本の仏法を中興しようとして企てるのであります。日本の仏教が民衆の支持の上に立って中興を遂げなくてはならないということには、榮西はどうも考えつかなくったようであります。この点は、興禅を考えるについても同じであり、前にもこのことは申し通っております。

榮西は大変な活動家で京都と鎌倉をしょっちゅう往還し、時には九州まで行くというようなわけでしたが、民衆とのかかり合いということになると、その活動の割合には教化の成果は乏しかったと思います。日本仏法の中興ということは一理想の実現を計ろうとしたものに違いありませんが、その中興が戒律の復興ということを基本にしていましましたから、持戒の重要であることは誰しもわかっていても、現実戒律を持することは誰でもそんなに簡単に容易に出来ることではなく、従ってその運動は多くの人々の共鳴を得ることはむつかしく、その点、榮西と同時代の法然が無戒の戒ともいふべき、従来の戒律主義を捨てた教えを説くことにより、大

変な共鳴者を得たのと好対照をなし、栄西の日本仏法中興はあまりにも理想主義に立ったものといえましょう。

叡山の仏法を市井の仏法に引き降ろすまでの狙いは確かでしたが、それからのもう一步というところに、栄西は時代認識を欠いたように思います。栄西という人は入宋を二度もした知識人であり、エリートであり、そのプライドが民衆と膝付き合わせて教えを説くという具合にはいかなかったのです。この栄西に少し時代間隔をおいて現れたのが東福寺を開いた円爾であり、円爾のことをここで少し申し上げないと、禅宗教団の成立がどのような経過を辿ったかを明かにすることが出来ませんが、このことについては『南都仏教』（第三十九号、五十二年十一月刊）に拙稿「円爾辨円と実相房円照」を寄せておきましたので御覧いただくとして、ここでは敢えてふれないことにいたします。円爾は栄西の綜合主義を継承してその思想には注目すべきものがあります。円爾のことは日本仏教思想史の上にもう少し注目されていい人ではないかと、かねがね考えております。

この円爾の活動と道元の活動とは、正しく時代を一つにするのであり、この二人は全く別な違った考えを禅について持ったのであります。円爾と道元とは二歳しか年が違わず、道元が五十四歳で亡くなった建長五年は円爾は五十二歳でした。円爾はこの後七十九歳まで生きますから、その後の活

動を道元没後において華々しいものになるのであります。最初に一遍のことを時宗教団との関係において申しましたが、実は円爾についても同じことがいえるのであり、臨済宗の東福寺派は派としては少なく、従って派祖としての評価は日本禅宗史の上では決して見られていないわけではありませんが、その時代において占めた円爾の存在は仏教史の上に極めて大きいものがあつたのであります。「聖一」の国師号を日本仏教史上で初めて得ている事実にもそれが窺われるかとぞんじます。

話は一寸脇道に入るかも知れませんが、道元が宇治の興聖寺に住した時分、円爾は博多に承天寺を開いています。この寺を開く際に、円爾が入宋して師事しました仏鑑禅師無準師範がわざわざ禅院の額字、牌字を自から書いて円爾に贈り届けていますが、このことは宋朝の禅が円爾によって日本に伝えられ、禅宗伽藍が創建されることを無準が祝福して贈ったものと思われ、それがその通り実現したかどうかはともあれ、円爾が禅宗伽藍の建立をいち早く意図したことは重視すべきであります。

その後、東福寺を道家の帰依によって建てることになるのでありますが、東福寺の伽藍がどういふ構造・形式であったかを見ると、どういふ教えを説いたかがほぼ推定出来るのであります。道元が興聖寺に建てた雲堂というものがどうい

う構造・形式のものであったかがわかると、興聖寺において道元がどういうふうにして説示、説法を行ったかの一端もこれまたわかるような気がいたします。『正法眼蔵』のなかに収められているこの興聖寺での説示の内容に併せて、それが知られたらと思います。その点、東福寺の伽藍の構造・形式は文献資料の上にある程度明かに出来るのであります。

建築史のずぶの素人のいうことです。ですから確かなことはもとより申せませんが、東福寺の唐門とか、五重塔・灌頂堂など艶やかな色彩が施してあったのではないかと思います。ということとは禅宗建築といわれるものとは大分違ったものであったということであり、実はこの間、かねてハッキリしたいと思って叡山の戒壇院に改めて行ってまいりました。むろん重要文化財に指定になっております。今の戒壇院は古色蒼然としたものですが、原型は叡山の老樹に囲まれて艶かな美しい色を輝かしていたものではないかと思えます。そのかつての原型の面影が剝落はしていますが、僅かに色彩をとどめているところであり、そんな感を深くした次第であります。

円爾は無準の禅を伝えましたが、東福寺を中心としたその禅は色彩的感觉でいえば可成り艶かなものであったに違いありません。円爾には後嵯峨天皇、龜山天皇、後深草上皇が相次いで御受戒になり、道家以下文武百僚が相踵いで弟子の礼

を取ったということから考えても、それは想像するにさもありませんと思うふしが充分あります。建築史の上で栄西の建てた建仁寺がどういふ伽藍であったか、それが東福寺の伽藍とどういふところが同じであり、どういふところが違っていたかなどということが明かになったら、具体的にそこで行われた禅の性格を端的に窺い知ることになろうかと思えますが、その点、それを証明し得るだけの知識をもたないのが残念です。

つい円爾のことに言及いたしました。マークットでいえば円爾は、栄西の地盤を継承したものであっていいでしょう。そこへ参りますと、道元も入宋して天童如浄の禅を嗣いで帰国したエリート禅者であり、出身もまた貴族でありましたが、帰国して暫く建仁寺にとどまるに、いささか異った見解を禅についていただいたようであります。それは禅宗は臨済宗とか曹洞宗とかというその宗ではなく、確かに道元は入宋して曹洞禅を如浄から伝えたものの、宗はいつに坐禅する宗でなくてはならぬとしたことでもあります。道元は禅宗という宗名をいうことさえきりました。それはこれまで禅宗の名で呼ばれて来た意味と違った意味でいうために、禅宗の呼称をきらったものと考えますが、いふならばそれは祇管打坐を宗とするものであったのであります。このことは明かに栄西、円爾が意図した文化を踏えての禅とは、意識的に区別

するものであることをいおうとしたものと解されます。

事実、道元が自からの禅を特徴あるものとして説くには、京都も鎌倉も市場は満杯であり、余程別なことを新しく唱えるのでなかったら、人は見向きもしなかったろうと思いません。このことを考えると宇治の興聖寺に伝道の拠点を置いたことは一大決意によったものであり、栄西とその門下の禅とはひそかに対決しようとする姿勢にあったと思います。道元は初め深草の安養院に寓居したのでありますが、この時点ではまだ対決の姿勢をとっていませんが、宇治に興聖寺を中国の径山の興聖寺に因んで建てるに、その寺構は極めて質素なものであったに違いありません。極楽寺という廃寺の仏殿をもって仏殿とするというものであったのであります。ただ禅院の規矩を嚴重に行なったのであります。道元は栄西や円爾が狙ったマーケットとは別なところを開拓しようとしたのであります。京都や鎌倉でパトロンになるような客を捜すというのではなくて、大きな伽藍を建てるというのではなくて、そういうものを必要としない宗旨を説こうとしたのであります。マーケットを拡大しようというのではなくて、マッセールを止める途を選んだのであります。そして遂には越前にまで引込み、売り込みでなく、売り惜み政策をとるのであります。もっとも越前に引込んだといっても越前は決して片田舎ではなく、若狭から京都へは交通の要路であり、その要

路に接近して早くから朝鮮半島の文化が流入していた地域であったかとぞんじます。この点、道元はマーケットの別天地を求めたともいえるかも知れません。親鸞が越前に教線を開拓したことを考えると、それは確かに未開拓な有力な見込のあるマーケットであったといえるかも知れません。

道元は一時越前から鎌倉に赴くことがありますが、この時既に蘭溪道隆が来朝していて、鎌倉に教線をひろめることは無理だと判断し、半歳ばかりの滞在ですぐに越前に帰っています。ここで道元と蘭溪との間に交渉があったかなかったかの論は別として、道元が蘭溪の存在を意識しなかった筈はないと思います。道元は越前に引込み、吉峯の草菴に菴居し、ついで大仏寺を建立し、やがてこの寺を改めて永平寺とするのでありますが、永平の寺号は中国の後漢の明帝の永平十年に仏法が初めて中国に伝わったというその年号に因んで附されたものといいますが、このことは道元が一大抱負をもってこの寺号を称したものと推測いたします。真の仏法は初めてこの越前の地に伝わったという意味のことを宣言したのではないのでしょうか。これは全く憶測ではありますが、永平の寺号をこのように考えるについて、大仏寺という寺号は東大寺の大仏を予想し、それはささやかな伽藍でしかなかったにしても、大仏寺たるの抱負をこのこの寺にいだいていたのではないのでしょうか。円爾が建立した東福寺は東大

寺の東と、興福寺の福をとって称したものとありますが、そうしたことがいわれるにつけ、この山庵とて大仏寺である道元はいいなかったのではないでしょうか。こう考えますと、道元が越前に至ったことは、十分な計画と信念のもとに行われたといわなくてはなりません。信念といえば道元がそれを強固にしたのは、何んといっても達磨宗一派の錚々たる人物が幾人も揃って道元の下に帰投したことであります。このことくらい道元が我が道を行かんという信念をもった時はないと思います。それは懷鑿、懷舛及びその門人の帰投であります。その第一団は興聖寺においてでありましたが、これらの人達が道元門下に帰投するまで、道元の教団を支えていく程の後継者は未だ現われなかったのでありますが、ここにおいて教団の体制を一挙に整えることになったのであります。

この達磨宗というのは、今日に一宗として存続しなかったことから、その占めた勢力が過少に評価されがちであります。が、実はその一宗を率いていた実力者の大日能忍の勢力は、或は法然と対比する程のものであったかも知れません。その一宗の法孫が帰投したというのでありますから、それは一大事件であったでしょう。達磨宗は多武峯を拠点としていましたが、多武峯が南都との間に不和を生じ、その僧徒の襲撃を屢々うけ、遂に堂舎の焼打ちに遇い、その衆徒は離散せざる

を得ない運命になるのであります。それが道元の門に帰入するのであります。

達磨宗は法系としては臨濟宗大慧下の仏照徳光から大日能忍―覚晏と嗣承し、覚晏門下に懷鑿、懷舛等が出るのであり、若し新たにその就くところを求めるとすれば、臨濟禅の柴西、或は円爾の法系に就くのが筋かと思いますが、柴西は『興禅護国論』の中で達磨宗に対して痛烈な批判をしていますから、その法系に就くことは至難であったでしょうし、円爾の法系は南都と親近関係にありましたから、これまたその法系に就くことは望めず、達磨宗の一派は行き場がないような仕末で、いわばそんなことから道元門下に帰投することになったかと思えます。道元がこの一派を包容するについては余程の決断があった筈であります。道元が禅宗という宗派の称すら否定したのであり、宗派意識に立つ限り達磨宗を包容することは、もとより困難であったに違いありませんが、それが出来たというのには考え方によっては、道元は禅の綜合主義に立ったともいえるでしょう。このことは柴西が日本仏法の中興を意図するに、総合仏教主義を標榜したのとある点では、共通する考えに道元は立ったともいい得るのであり、道元が宗派仏教を否定する考えをもった一因は、宗派仏教の使命は、この時代に終わったという観念をいだいていたのではないのでしょうか。

栄西は綜合仏教主義に立ちながら、禅一宗を樹立しようとし、道元は理念としてはその禅一宗の樹立を否定したのであります。このことは宗派仏教の否定に外ならないわけですが、マーケットがこれまで宗派仏教の樹立拡大につながっていたことを思うと、前述したようにその拡大を意図しなかったというよりは、寧ろ立場を異にしたといった方が当たっているかも知れません。このことは懷辨の『正法眼蔵隨聞記』のなかで、仏法興隆とは何かと語っている点に照しても明らかであります。現実には道元がどのように宗名を否定しようと、その教団は道元宗ともいべきものを形成したわけですが、それは無宗の宗ともいべきであり、ここに想起するのは法然の戒律観に見る無戒の戒ともいべき観念であります。

この道元宗ともいべき宗名のない宗は、道元の後を護って永平教団の樹立につくした懷辨によって曹洞宗になったのではないかとぞんじます、いわゆる三代相論が起るのは宗の観念が流動的で、そこに固定したものがなかったことからではないかと思えます。寛元元年を境にして道元の臨済宗批判が盛んになっていったというのが私の持論ですが、それは禅の宗派といえば我が国にあっては臨済宗であり、宗派仏教の否定の立場からそれをいっているのであり、自から曹洞宗という一宗を唱えることによる対宗派感情からいっているのではないと思えます。この点これまでの考えと若干

違った考え方を今はしています。このことについては漢文語録として纏められている『永平広録』と、仮名書き法語である『正法眼蔵』とを対比して見る時、いろいろと考えさせられる問題が少なくないのでありますが、それについて結論めいたことを申すにはもう少し時間がかかることでしょう。

道元の臨済禅批判については、その根底に宗派意識からするものがあつたとすると、天桂がこの問題にふれていることについては、大いに吟味すべきものがあるやに思います。これもまた話は横道に入りますが、懷鑿、懷辨の師である覚晏についてであります。『永平広録』のなかで道元は先師覚晏と語って懐鑿のために上堂をしております。懐鑿は永平寺教団の経済的基盤を道元に寄せるのに大きな力のあつた人であり、教団のなかで重要な位置を占めたに違いありません。その懐鑿が師としたのは覚晏であつたとして、どう理解すべきでしょうか。永平寺の齋粥の供養をする侍僧について語っている文献の中に、第一比丘懷辨、第二比丘覚仏とあります。この覚仏のことはよく伝がわからないのですが、懷辨と並び称している限り、教団の中で有力な人物であつたことは疑いありません、推定ですがこの人は覚晏の弟子であつた人かと思えます。覚晏門下が覚晏を先師と仰いで永平教団の中にあり得たのであります。この覚仏は多分根室の伝法院に居た人らしく、法灯国師心地覚心はこの覚仏の教え

を受けるのであり、心地覚心が道元から菩薩戒を受けることになるには、ここに何か関連があるのじゃないかと憶側いたします。

なお、道元門下についていえば、『永平広録』の「興聖寺語録」の编者として見えている詮慧は、懷昇の影に隠れていて仕舞うのですが、この詮慧について明かにする資料が出て来たら、永平教団がどういいう推移を辿っていったのか大凡そ知ることが出来るんじゃないでしょうか。詮慧の名は道元が蘭溪との返書として伝えられているものに慧達と共に見えておりますが、この兩人は蘭溪の門に参じたようであります。蘭溪の門には済洞と区別することなく参ずるものが多かったと見られますから、この来朝僧について詮慧も参禅をした一人かと思えます。懷昇の存在がクローズアップされて行ったのに対して詮慧の存在が不鮮明になっていったのは、道元が蘭溪宛の書状に「雲遊之次、敬領和尚（蘭溪）書薰香拜見」としているように、道元の下を離れて雲遊したことに無関係ではないのではないのでしょうか。詮慧といえれば門下に経豪があり、経豪の『正法眼蔵御抄』についてまだよく調べていませんが、経豪を通じて詮慧について知り得る何かの手がかりがないものかと思っております。

永平教団につきましてはかつて寂円派のことに注目し、一文を纏めたことがあります。もう少し視野をひろくして、

この辺のところ調べるべきではないかと、考えたりいたしております。ただいい得ることは、道元の在世においても、懷昇の時代においても、永平教団は決して大きな組織をもっていたものではなかったらうと思えます。まして興聖寺教団しかりであり、興聖寺教団にあつては懷昇の『正法眼蔵随聞記』に道元が「衆の少なきことを憂ふること莫れ」としていることから推して知られるように、衆僧は決して多くはなかったのであります。話をマーケット論に戻しますと、京都や鎌倉のように永平の山中にあつては、顧客を吸集するなどということは望めないことであり、従つて道元は初めからそうした考えをもったわけではないのであります。鎌倉時代の仏教活動はマス即ち量を目標としたといつていいと思いますが、教えをひろめるにはもうマスマセルでは駄目だということを感じ、要は顧客の数ではなく、道心のあるなしによるとし、絶対に信頼される教え、即ち価値ある高価なものの逸品主義をもって顧客に応えようとしたかに窺われます。この永平教団が日本仏教のなかの大教団に拡大発展するのは、江戸時代になつてからかと思えますが、道元の選んだ逸品主義が大いに評価されることになつたためであります。そこえいくとマーケットにいろいろのものを並べ進じた臨濟禅は、あまつさえマーケットを矢鱈にふやして品物をだぶつかせた恰好になり、客足を遠のかしたものといえるのじゃないでしょうか。

大変雑駁な話をマーケット論に托して申し上げるなど、いくらか不謹慎のところがあったかとぞんじます。最初にお断りいたしましたように、思いつきを申したような次第ですから、お許しをいただき度く存じます。これで私の話は終りといたします。